

新潟県のLD(学習障害)児・者の教育運動

— 全国LD親の会新潟支部「いなほの会」代表

沼田夏子さんが語る

新潟LDの子どもと親の会は、95年度から歩み始めた

— LDと「いなほの会」について話してください。

LD(学習障害)については、はまぐみ小児療育センターの新田医師が、説明されているのを紹介します。LDは、「全般的な知的発達に遅れが無いにもかかわらず、聞く・話す・読む・書く・計画する又は推論するなどのうち、特定の学習領域がとても苦手で、その習得に大変苦労している状態をさします。(中略)男の子に多く、日本では四〇人〜五〇人に一人くらいのは発生頻度といわれていますが、医学的に学力の特異な

困難と診断される例(読字障害、書字障害、算数障害)はそう多くありません。元来、LDは教育用語であり、実際には読み・書き・算数といった学力の特異な困難さの他に、話しことばの困難さ(話す・聞く)まで含めて、学習上、個別の配慮を要する状態に対して使われています(新田初美「LD(学習障害)周辺の軽度発達障害」にいがたの教育情報」66号、P 38)。

「いなほの会」は、八年前に生まれました。いまは、新潟LD児・者親の会「いなほ」と言っています。昨年度の総会は、会員個々が原点に帰って子どもを見つめようと「熱意、知識、さらなるもう一歩」とまとめました。そのとき(四月)の会員数は一〇九名、他に

賛助会員二九名でした。一月現在、会員一三七名、賛助会員四〇名です。後者は、LD児・者の親でないが、会の趣旨に賛同して、年会費二千元で会の学習や情報に接していただいています。医師、心理療法士、教師などが主です。因に会員は年会費は六千元。会員の半数は、ここ二、三年に入会した方です。かつては、ただ変わった子、勉強が出来ない子として片付けられていたのが、医学や心理学、教育学等の成果でようやく光が当たるようになった、と思います。

子ども達はグループ遊びで、親と協力者は事例研究で成果を

—今の活動の重点は何ですか？

会員が増え、県内のネットワークが広がり、グループ単位の活動が大切になってきました。九つのグループが出来て、それぞれに代表がいて事務局と連絡を密に活動します。新潟市近辺には七つのグループがあります。たとえばラピュタ（小学校低学年グループ）は、昨年四月に出来たばかりで、初心者親と子ども達で、あせらずゆっくりと、親と子がほっと出来る場所を目指しています。他は中学生、高校生、十八歳以上の青

年、女の子、小学校中・高学年、中学二年～小学六年とあって各自ニックネームを持っており、この他に地域にもチームトトロ（長岡グループ）、いなほ柏崎（柏崎グループ）があります。但し、グループへの参加は任意で、自主的です。来年度からは、行事の担当講演会の運営協力に加えて、会報の編集・発送もグループに任せることになりました。会報は二ヶ月に一回の発行で、B5版12ページ建てが通常、去年の五月から〇二年一月まで5号を出しているところで、通算52号です。

グループの遊びは、多様で例えばドラエモンズ（中学二年～小学6年のグループ）は、月二回の遊びの会を開いています（他に月一回の親の茶話会を）。新潟大学の学生がボランティアで二人参加してくれますし、遊びのなかみは子ども達の話し合いを大切にして決めています。柏崎地区は上越教育大の学生に協力してもらっています。

十八才以上の青年グループは、今年度からの発足で、試行錯誤をしているようですが、彼ら同士の交流が深まるように見守っています。ただ先年度までに親同士の茶話会を続けてきましたから、それが土台になり出



発できたのです。会員だれでもが参加できる場も「おしゃべり会」として月一回を原則に開いています。たいてい新潟市総合福祉会館で、午前は運営委員会からの報告など午後は各グループの報告とフリートークをしています。

事例検討会に父親が参加、成果を

昨年、新潟日報（六月八日付）にも紹介された事例検討会は、父親の参加で目覚ましい成果を挙げています。たまたま夫婦そろって出席し指導者の適切な助言を受けて、家で実行したらはっきりした効果が見えたのです。それまで夫は妻の勉強してきたことを疑いの目で見ていました。しかし、家庭内で指導方針が無いか、バラバラではうまくいくはずがありません。実行したのは、「食事の時は文句を言わない」、「学校に行けとか、勉強のことは一切言わない」などを実行した結果、ついに家庭に笑いが復活するまでになったそうです。つまり家族が共通の指導方針を持つことがとても大切なのです。

事例検討会は、今年度は新潟地区で八回を予定していますが、一人の子どもについて二回行います。指導

者が限られているので多くの子ども事例を検討できないのが悩みです。いまは、長沢正樹先生（新大助教）と松岡勝彦先生（新大助教）が担当してくださっています。親が希望し、しかも学級担任の協力が得られるのが条件です。両親の参加が普通になってきました。

一回目は、長期目標と短期目標をその子に即して決めます。例えば前者は、「同級生と年齢相応のつきあいができる」。後者は、「下着姿を見られないように着替える」など指導の結果が示せる表現で設定します。学校全体や学級の配慮事項、指導方法、指導者、評価なども決めて終わります。二回目は、四〜五カ月後に指導の結果を検討して、さらに改善した指導計画にしていけます。あるケースではやがて同居の見通しもあって祖父母も参加して、より効果的だったと感謝されました。学校の先生は参加して、指導に見通しができると喜ぶ方が多いようです。検討会には会員は一〇名の参加を募り、賛助会員には多数の参加を呼び掛けている。ほぼ十五〜二〇人の出席のもとで行っています。余り多くては勉強に支障が出ますから。



新潟県LD学会学校教育部会が発足、 いっそうの協力を

—これからの見通しはいかがですか？

日本LD学会は、ほぼ一〇年前に出来ました。全国LD親の会がその一年前にできたのです。このことは特徴であり、メリットでもあったのです。というのは、学会に初めから親の声が届いていたからです。とにかく学会は、研究者・教員の声だけになりがちです。から。私たち新潟の親の会も全国LD学会には早くから参加してきました。昨年秋に、新潟県LD学会学校教育部会が生まれました。会長は、藤原義博先生（上越教育大）で、先生には柏崎地区の会員がずっとお世話になってきました。その部会が主催で一月下旬に研修会を、開きました。学校教育の中でLDが、それにふさわしい対応がいまより強められるようになることを願っています。

「いなほの会」は、七月から十一月までに三回の講演会を開き、いずれも百〜二百名の出席で成功しました。参加者の四割が親であと六割が教員や関係者と見られます。学校の先生がたが多数参加されているのを

心強く思います。

しかし率直に言って、学校は、まだ関心や理解が足りないと感じています。県教委はじめ行政からも支援していただいで感謝していますが、学校を出てからの生活も視野に入れて活動していかなければなりません。いまのような不況がつづくなら、就職・就労は、とても困難になると思います。昨春「いなほの会」の子ども達が進んだ路は次のとおりです。中学卒は、高等養護学校四名、全日制高校三名、専修学校一名、高校卒は、四年制大学一名、専門学校一名。

—ありがとうございます。

（聞き手—吉田武雄、本田敏彦）

